

【報告】

日本におけるイスパニア文化への意識の変遷

—スペイン語初修者のアンケート分析¹⁾—

田林 洋一¹⁾*

1) 東北大学高度教養教育・学生支援機構

本稿では、筆者が2017年4月及び同年7月に初修外国語としてのスペイン語履修者を対象に行なったアンケートを分析する。その結果を、同様の調査を行なった松田アンケート（1959年実施）及び坂東アンケート（2008年実施）と比較し、学生が潜在的に抱いている「イスパニア文化」がどのようなものかを検討する。結論として、①一般的日本人の「イスパニア観」は明治時代のそれとほぼ変わらずステレオタイプ的であること、②おおよそではあるが、初修のスペイン語を履修した学生もそのステレオタイプから脱却していないことを見る。最後に、日本におけるイスパニア文化に関する情報は質・量共に十分でないことを指摘し、今後の課題と提言としてイスパニア文化をより包括的に学生に教授することの可能性と効果を指摘する。

1. 序 -本稿の目的と用語の整理

本稿の目的は、日本人がスペイン及びスペイン語圏（以下「イスパニア」とする）に対して抱いている伝統的なイメージと、様々な交通手段、電話やインターネットをはじめとする情報網が整備された21世紀の現在のそれとを、アンケート調査や日西交流論などを通して比較検討することである。

なお、本稿で「スペイン」ではなく「イスパニア」という呼称を用いる理由は大きく3つある。1つ目は、「スペイン」という国が確立された時期が歴史家によって様々だからである。多くのイベリア史研究者が支持するスペイン国家樹立時期の定説は、レコンキスタが終了した1492年であるが、カスティーリャ王国の女王イサベルとアラゴン王国の王子フェルナンドが結婚してカトリック両王（Reyes Católicos）が誕生した1469年、果てはブルボン王朝が成立した18世紀と異論も入り乱れている。いずれの説を採用するにせよ、イスパニア研究に際し、スペイン国家樹立以前のイベリア半島及びカスティーリャ語が話されている（いた）地域を捨象することは好ましくない。

2番目は、スペイン国家が成立した時期と現在のスペインとでは、その国土、植民地、世界への影響力が著しく異なることである。従って、現在のスペインと国家成立直後の「スペイン」は、固有名詞こそ同じで

あれ、同列に扱うのは無理がある²⁾。

最後の理由は、周知のようにスペイン語はスペインだけで話されているわけではなく、メキシコや、主にブラジルなどを除いた中南米（いわゆるラテンアメリカ）でも公用語として使用されているからである。スペイン語初修者の中には「スペイン語」が広くラテンアメリカでも使用されていることを前提知識として持っていることがあり、また文化的にも、ラテンアメリカを無視してスペインを語ることはできない。

1.1 調査方法と調査対象、比較対象

現在、日本人が抱くイスパニアのイメージはその対象や年齢層、職業などによって多様であるため、本稿ではスペイン語を初めて履修する（主に）大学1年次生に対して行なった2回のアンケートの分析結果を踏まえて考察することにする。アンケートは2017年4月及び同年7月に東北大学の初修語としての「スペイン語」授業履修者（工学部所属、理学部・農学部所属、法学部・経済学部所属）を対象に実施した。最初のアンケート（以下「第1アンケート」とする）の回答者数は122名、2回目のそれ（以下「第2アンケート」とする）は121名である。

日本人のスペインに対する「伝統的な」イメージを確定することも難しいが、本稿ではルイス・フロイス

*）連絡先：〒980-8576 仙台市青葉区川内41 東北大学高度教養教育・学生支援機構 tabayashiyouchi@tohoku.ac.jp

の研究で知られる松田毅一が行なったアンケート（以下「松田アンケート」とする）及び坂東（2008: 206-7）の行なったアンケート（以下「坂東アンケート」とする）を基盤とする³。松田は、1959年夏に2000枚のアンケート用紙を用いて、東北から九州にかけて現地の住民にスペインの印象について調査している⁴。坂東は、2008年5月に「スペインの基礎知識」の授業に出席している新入生約100名にアンケートを実施している。松田アンケートと、坂東アンケート及び本稿のアンケートにはその規模、調査対象などにかんがりの乖離があるが、幸いなことに松田アンケートと坂東アンケートには約50年、坂東アンケートと本稿のアンケートにも約10年の期間が空いており、比較対象としては有効であろう。

1.2 先行研究のアンケート調査結果

松田アンケートの「スペインというとな何を連想するか」という問いに対する答えは以下の通りである（川成・坂東（2008: 206））。

①闘牛、②オペラ「カルメン」、③内乱、④コロネブス、⑤ジプシー、⑥フラメンコ、⑦ラテン音楽、⑧無敵艦隊、⑨フランシスコ・ザビエル、⑩16世紀の海外植民、⑪情熱、⑫ギター、⑬フランコ総統、⑭イサベル女王、⑮ピカソ、⑯ヴェラスケス、⑰カトリック教会、⑱葡萄酒、⑲イグナシオ・ロヨラ、⑳ピレネー山脈

坂東アンケートは「スペインについて抱いているイメージとは何か」と問い、以下のような結果になっている。

①フラメンコ、②闘牛、③パエリア、④サグラダ・ファミリア、⑤情熱、⑥アントニオ・ガウディ、⑦マドリッド、⑧バルセロナ、⑨太陽、⑩ドン・キホーテ、シエスタ、赤、⑪芸術、陽気、⑫ヨーロッパ、植民地、アルハンブラ宮殿、レアル・マドリッド、ギター、⑬ザラ、マンゴ、南米、スペイン料理、ザビエル、ロルカ、カルメン、オレンジ、パンプローナの牛追い祭り、カトリック

以上の数値を踏まえ、坂東は1959年の松田アンケートと2008年の坂東アンケートとの相違は、以下の5つの要素が原因であると指摘する（坂東（2008: 207-9））。

①スポーツの国: サッカー関連の語が増えたことに加え、テニスやF1などスペインで盛んなスポーツが日本に紹介されたこと。

②料理の国: カタルーニャのレストラン「エル・ブジ」の登場や、スペイン料理の世界的成功、「タパス・ピンチョス」のブーム。

③ファッションの国: スペインの一流ブランドロエベ（LOEWE）に加えて、ザラ（ZARA）やマンゴ（MANGO）の躍進。

④祝祭の国: スペインの三大祭りやトマティーナ（トマトの投げ合い）祭りなどの日本への膾炙。

⑤芸術の国: スペインは元々美術大国であり、エル・グレコの《受胎告知》を所蔵する倉敷の大原美術館などがあること、建築ではアルハンブラ宮殿に加えて、アントニオ・ガウディのサグラダ・ファミリアのインパクトが大きかったこと。

坂東の分析には異論もあるが、少なくとも「伝統的イメージ」である松田アンケートとの乖離を説明できるという点では正鵠を得ている。例えば松田アンケートの③内乱や⑬フランコ総統の項は、坂東アンケートでは出てこない。1959年はスペイン内乱（1936-1939）及びフランコ独裁政権（1939-1975）の影響が未だスペインに色濃く残っていた時期であるが、1975年にフランコ将軍が死去して時の国王フアン・カルロス1世が即位し、民主主義政治を確立してそれが当然と目される2008年では、フランコの名前は過去の遺産である。そうした時代の変化を反映するかのようになり、松田アンケートに登場するイサベル女王、無敵艦隊、フランシスコ・ザビエルなどの項目は坂東アンケートでは出現せず、代わってレアル・マドリッド、サグラダ・ファミリア、ザラ、マンゴなどの「近現代的な」項目が並んでいる。

一方で、闘牛⁵、フラメンコ、情熱などの「伝統的イメージ」も坂東アンケートでは根強く残っているこ

とから、現在の日本人のイスパニア観は「伝統的なイメージを保持しつつ、近代化・ヨーロッパ化したスペイン」に根差していることが分かる。

本稿では、以上の2つのアンケート結果を先行研究と位置づけ、本稿のアンケートとの比較分析を行なう。

2. 本稿での第1アンケート結果とその分析

第1アンケートの概要は以下の通りである。

実施場所：東北大学川内キャンパス講義棟

実施時期：2017年4月24日、25日、26日

実施方法：教室内で一斉に行なう記述式。複数回答可

実施時間：10分（必要があれば、それ以上）

第1アンケートの内容は以下の通り。

Basic-Q1: あなたの年齢を教えてください。

Basic-Q2: あなたの性別を教えてください。

Basic-Q3: あなたのスペイン語学習暦は何年ですか。

Q1: あなたがスペイン語を履修した理由は何ですか。

Q2: あなたは、「スペイン」という言葉を聞くと、何を連想しますか。

Q3: スペインないしはスペイン語圏について、あなたが知りたいことは何ですか。

Q4: 自ら進んでスペインの文化や言語などに触れたり、勉強しようとした（ないしは既にしている）ことはありますか。あるとしたら、どのような媒体で、どのようなことに触れましたか。

Q5: スペイン語の先生に、「スペイン語」以外にどのような内容の授業を期待しますか。

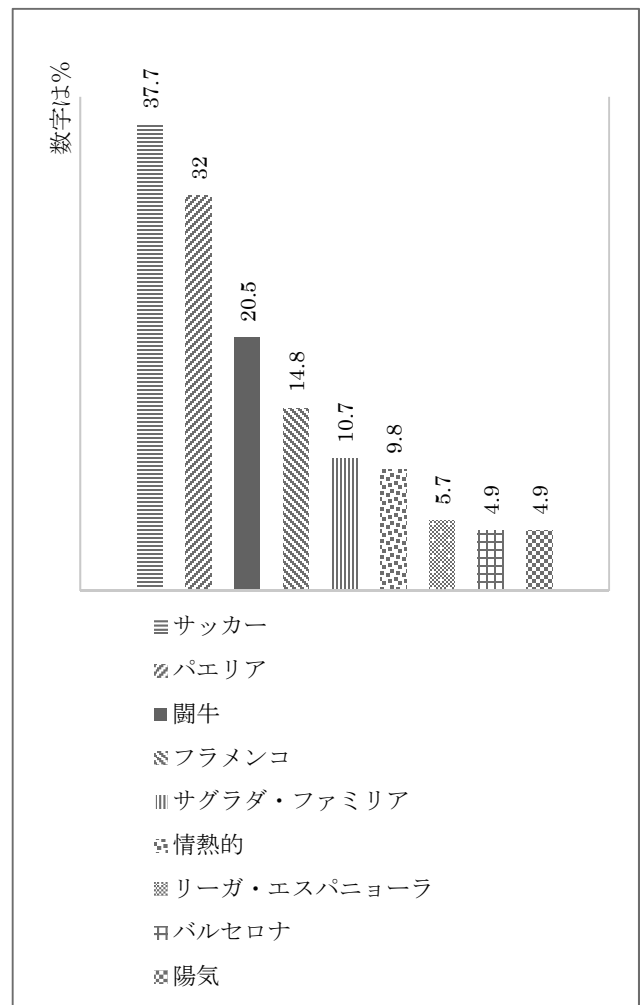
Q6: スペインやスペイン語について、現在知っていることは何ですか。

2.1 本調査における第1アンケート集計数値

第1アンケートの集計結果は以下の通りである（括弧内の実数は回答数、次は%を表す）⁶。表1を参照。

- ①サッカー (46 (37.7%)), ②パエリア (39 (32.0%)),
- ③闘牛 (25 (20.5%)), ④フラメンコ (18 (14.8%)),
- ⑤サグラダ・ファミリア (13 (10.7%)), ⑥情熱的 (12 (9.8%)),
- ⑦リーガ・エスパニョーラ (7 (5.7%)),

- ⑧バルセロナ, 陽気 (6 (4.9%)), ⑩ヨーロッパ, マドリード, 地中海, 無敵艦隊 (5 (4.1%)), ⑭芸術, タンゴ, 大航海時代 (4 (3.3%)), ⑰植民地, 豚, 国旗 (3 (2.5%)), ⑳中南米, アヒージョ, ガウディ, オレンジ, 赤, 太陽の沈まぬ国, 音楽, ピレネー山脈, 地中海性気候, オリーブ, ポルトガル, シエスタ, フランコ (2 (1.6%))



【表1: 「スペイン」という語の連想 (8位まで)】

突出して多かったのがサッカー関係の語で、「サッカー」と「リーガ・エスパニョーラ」がそれぞれ1位と7位にランクインしている。次に多かったのが料理関係の語で、「パエリア」「アヒージョ」、更に「豚」「オレンジ」「オリーブ」などの農林水産物関連の語を足し合わせると、その総数は48 (39.3%) で、「サッカー」をも上回る。一方で「伝統的なスペインのイメージ」である「闘牛」「フラメンコ」「陽気」「無敵艦隊」などの語彙や、地理的・歴史的な項目もかなりの数を占

めている。

2.2 先行調査との比較と分析

2008年に行なわれた坂東アンケートと比較すると、顕著な特徴は「近代的なスペイン」を象徴する語が思いの外少なく、更に相当数が偏っていること、「伝統的なスペインのイメージ」が坂東アンケートに比べて多いこと、固有名詞やある分野に特化した語彙が少なく、抽象的な語が目立つこと、などが挙げられる。これらの特徴の原因は、畢竟①母集団の性質、②アンケート実施の時期、の2つの要素に還元されよう。

まず母集団の性質であるが、坂東アンケートは、2008年5月に京都外国語大学外国語学部スペイン語学科「スペインの基礎知識」の授業履修者に対して行なわれている。京都外国語大学では、2008年前期（春学期）に「スペイン文化の基礎知識」という科目が開講されており（後期（秋学期）には「スペイン社会の基礎知識」が開講されている）、これらの科目は「専門語基礎科目」として、スペイン語学科に所属する学生は卒業までに必ず履修しなければならない。即ち、当該授業科目にはスペイン語を専攻する学生が出席しており、当然のことながら入学前には相応のイスパニアに対する興味があったことが推察される。

また、坂東アンケートは2008年5月に実施されており、新学期及び授業が始まってから少なくとも2週間以上が経過している。それまでの間、教員（坂東）はイスパニアに関する基礎知識の一端を学生に教授しているだろう。

本稿のアンケート対象者は東北大学の初修語としてのスペイン語科目履修者であるが、入学前後のイスパニアに対する興味・関心は、スペイン語専攻に所属する学生のそれより低いことが予想される（前述のように、今回の調査対象の学生は工学、農学、理学、法学、経済学をそれぞれ専攻している）。また、アンケート調査は前期（第1 Semester）のごく初期に行なっているので、教員が「イスパニア文化」について言及する機会はほとんどない。この2点から、坂東アンケートで固有名詞が頻出することと、第1アンケートで「伝統的なスペインのイメージ」が豊穡に見られる現象が説明されよう。

だが、これらは本調査においてマイナスの要因ではなく、むしろ「一般的日本人」の対イスパニア観を検討する上では肯定的な効果をもたらさう。坂東アンケートにおいて、スペイン語を専攻する学生のみを対象として「一般的な日本人像」を想定することは、少なくともスペイン語圏関連の調査において強力なバイアスになりうる⁷。一方、本稿の調査対象はいわゆる「文系」「理系」を専攻する学生が混在し、かつスペイン語を専攻しているわけではないので、より「一般的な日本人像」に近いことが予測される⁸。

以上の点を踏まえて更に第1アンケートを精査してみると、坂東がいみじくも指摘した「(スペインは)今やヨーロッパにとどまらず、世界の舞台で眩いばかりの存在感を示している。もはや古いイメージだけでは語れないスペインがそこにある」、「それにもかかわらず日本ではスペインといえば(中略)伝統的なイメージが支配的である」のは事実としても、「しかしまた、アンケート調査から、この50年の間に(中略)新しいタームが広がっていることもまた事実である」(坂東(2008: 207))という記述には容易に首肯しかねる。実際、本調査で明らかになったことは、1つには2017年現在でも、サッカーを除けば未だに「パエリア」「闘牛」「フラメンコ」「情熱的」「陽気」という、「古き良きスペインの伝統的イメージ」が一般的日本人を席卷していることである。2つ目は、「スペインはありていと言えば『太陽と情熱の国』であるが、近年(特にインターネットやマスメディアなどで)何となく世界から注目されている」といった程度の認識しか日本人は持っていないということである。

2.3 第1アンケートから見る日本のスペインに関する情報の偏重

まずは1つ目の「スペインの伝統的イメージが未だに日本人に根付いている」という点を検証しよう。興味深い事実は、松田アンケートでランクインされている「フランコ」「無敵艦隊」などが、坂東アンケートでは見当たらないにもかかわらず、第1アンケートで出現していることである(付言するならば、松田アンケートで14位に食い込んでいる「イサベル女王」は、第1アンケートでも1名から回答があった)。即ち、

松田アンケートは第1アンケートと極めて類似しているのである。

この事実が意味するところは、前述したように、何らかの理由でイスパニア文化に関する情報を能動的に得ていなければ、日本人は「伝統的なスペインのイメージ」しか享受できないということである。これはとりもなおさず、日本のマスメディアを始めとする情報網のレベルが未だに1960年前後（ないしは明治時代、第3節参照）であることを示唆する。

例外はサッカー及び料理関係の語彙である。第1アンケートでランキング1位に君臨した「サッカー」、7位の「リーガ・エスパニョーラ」（そして地名だけでなくサッカーチームとしての「バルセロナ」（8位）や「マドリード」（10位）も含みうる）などのチームは、1993年のJリーグ発足以来、日本中に吹き荒れたサッカーブームを反映していると言えるだろう。

Jリーグがスタートしたことによって、それまでどちらかというマイナーな競技で、常に野球の後塵を拝してきたサッカーというスポーツが、日本で俄かに脚光を浴びることとなった。それに伴い、サッカー大国スペイン及びラテンアメリカ各国のサッカーに関する情報が細大漏らさず日本列島を駆け巡った。実際、2017年現在ではJリーグに所属しているグルージャ盛岡（grulla = 鶴）、大宮アルディージャ（ardilla = リス）、横浜Fマリノス（marinos = 船乗り）、アスルクラロ沼津（azul claro = 明るい青）、ガンバ大阪（gamba = 海老）、セレッソ大阪（cerezo = 桜）、アビスパ福岡（avispa = スズメバチ）の7チームがスペイン語を用いた名前を冠している。こうしたチーム名は、「スペイン＝サッカー」という連想の結果ないしは原因とも見なしうる。

また、サッカースペイン代表は2010年の南アフリカ大陸で初優勝を飾ったが、彼らの日本での愛称は「無敵艦隊」である。現在の日本の「スペイン＝サッカー」という結びつきの強さを考えると、第1アンケートで10位に入った「無敵艦隊」は、1588年のアルマダの海戦でイングランド艦隊に敗れた歴史的な軍隊としての「無敵艦隊」ではなく、サッカースペイン代表のそれをも反映している可能性が高い。つまり、松田アンケートの「無敵艦隊」は歴史的な軍隊、第1アンケートの

「無敵艦隊」はサッカーチームの愛称（及び軍隊としてのそれ）をそれぞれ指し示していると言っていいたろう。

料理関係の語については、松田アンケートでは辛うじて18位に「葡萄酒」がランクインしているのに対し、第1アンケートではパエリア（2位）やアヒージョ（20位）などの具体的な料理名が見られる。これは、坂東の説明の妥当性（1.2節②参照）を裏づけると共に、2010年にスペイン料理がユネスコの無形文化遺産に登録された影響も示しうる⁹。

2つ目を検証するに当たって、第1アンケートの第14番目の項目を見よう。挙げられている語は「芸術」「タンゴ」「大航海時代」などであるが、そもそも「芸術」からして無難な回答と言わざるを得ない。「ピカソ」「ベラスケス」¹⁰（松田アンケートでは15位と16位にランクインしている）と言ったスペイン芸術に関する人名が、第1アンケートではほとんど出てこないのである。辛うじて出現したスペイン芸術に関わる人名は20位の「ガウディ」だけである（芸術分野以外の人名として挙げられたのは同20位の「フランコ」であり、「ザビエル」「イサベル」「マゼラン」などは僅かに回答数が1である）。これは、日本人が「スペインは芸術が盛んである」という漠然とした知識こそ得ているものの、具体的な情報には接近していない（例えば、ある特定の作家や芸術家などの芸術に積極的に接するなどの行動をとっていない）ことを意味する。

更に述べるならば、スペインに関して未だにいくつかの基本的な事実誤認がある。例えば「タンゴ」はスペインで有名でないとは断言できないが、恐らく回答者の意図するところは「アルゼンチンタンゴ」からの連想であり、アルゼンチン文化とスペイン文化を混同しているだろう。

また、「大航海時代」は、周知のようにスペインとポルトガルが中心となったヨーロッパが、インド航路発見やアメリカ大陸への到達を成し遂げた一連の事業である。だが、日本人に膾炙している代表的なスペイン人探検者はエルナン・コルテスやフランシスコ・ピサロくらいで、それ以外は主にポルトガル人が多数を占める¹¹。喜望峰に到達したディアスやインド航路を開拓したバスコ・ダ・ガマ、ブラジルに漂着したカブ

ラルはポルトガル人であるし、南アメリカ沿岸を探検したアメリカ・ヴェスプッチや北アメリカに到達したカボト親子はイタリア人である。コロンブスはスペイン女王イサベルから援助を受けたものの、イタリアのジェノヴァ生まれと考えられている。第1アンケートで「マゼラン」を挙げた回答者も、恐らくポルトガル人マゼランをスペイン人と誤認した可能性がある。

これらと関連して20位の「音楽」という項目についても、(恐らくはフラメンコやギター、オペラ「カルメン」からの類推と思われるが)具体的な名称は出てこない。スペインの音楽劇サルスエラやチェロの巨匠パブロ・カザルス、テノール歌手プラシド・ドミンゴなどは、いわゆる日本の「スペイン音楽通」だけのもので、実際に口端に上ることは少ない。

総括すると、現代の「平均的な」大学1年次生(18歳から22歳程度)は、スペイン語圏に関してはほぼ60年近く前の松田アンケートに準じた回答しかできないと言うことができよう。一方、坂東アンケートは、①スペイン語を専門に学習しようとしている学生を対象にしていること、②実際に教員が現場で、数週間ではあるが「スペイン語圏の実情」などを専門の授業内で講義していること、などから、その結果はプロトタイプの「一般的日本人」からは多少なりとも乖離していると分析できる。

3. 日本のイスパニア研究の遅れ

3.1 盲目的に取り入れた西欧のイメージ

以上から、イスパニアに関する日本(人)の認識は、少なくとも半世紀を経た今でも大幅な前進がないことが推測される。実は、日本のマスメディアはイスパニア文化に対するアンテナが異様に低い。例えば佐々木(2015: 18)は師である上智大学の神吉敬三の「わが国におけるスペイン紹介、あるいはこう言ってよければスペイン学の現状はいまだ明治時代である」旨の意見を紹介している。佐々木論文の初出は1975年3月14日号の「朝日ジャーナル」であるが、それから四半世紀以上経った2017年の第1アンケートの分析結果に鑑みても、こと「スペイン学」「イスパニア学」に関してそれほど目立った進展はない。

日本のイスパニア研究の遅れは、それ以外にも多く

の識者が警告を発している。例えば有本(1983: 3)は「スペインを情熱、フラメンコ、闘牛、シエスタ(昼寝)などで片付けるほど乱暴なことはない」と述べており、これらのタームは皮肉にも本アンケートで上位を占めている(その他にも増田(1992: 8)、池上他(1992: はじめに)などでも同様の指摘を見ることが出来る)。牛島他編(1999: 301-2)は、例外は評論家の堀田好衛のスペイン論であると指摘しているが、堀田は「スペイン通」として知られている論客で、専門的と言ってもよい数々のスペイン関連の作品を著していることから、およそ「一般的な」日本人ではない。

神吉が述べる「明治時代的スペイン像」には、1871年12月23日から1873年9月13日に欧州に派遣された岩倉使節団の影響が色濃く反映されていると思われる。もっとも、岩倉使節団の目的の1つに「西洋文明の調査」があったにもかかわらず、彼らはスペインには足を踏み入れていない。彼らのスペイン観はおおよそイギリス・フランス・ドイツなどからの受け売りであり、それらの国々も「ピレネーの向こうはアフリカ」の格言が示す通り、スペインを軽視していた。

例えば、当時の知識人とも言うべきイギリスが生んだ作家、サー・アーサー・コナン・ドイルの「シャーロック・ホームズシリーズ」の短編『ソア橋(*The Problem of Thor Bridge*)』にも、ブラジルを画一的な「情熱の国」と捉える描写が出てくる。ドイルの時代のイギリス国民は、恐らくブラジルもスペイン語を公用語とする他のラテンアメリカの国々に対しても、同様なイメージを抱いていたであろうことは想像に難くない。岩倉使節団とドイルの執筆時期がほぼ同じとあってみれば、スペイン(イスパニア)に対する印象も似たり寄ったりであろう。

そうした「偏りのある」西欧諸国のイスパニアに対するイメージを、日本人は半ば盲目的に引き継いだことはほぼ間違いない。つまり、岩倉使節団及び日本人は、当時の西欧のスペインに対する「偏見」をそのまま取り入れたということである。そしてそれ以降、マスメディアを始めとする日本のイスパニアの情報網は、およそ今日に至るまで更新されていないのである。もっとも、日本とスペインは日本軍のフィリピン進行の影響で1945年4月12日に国交を断絶しており、1952

年に国交を回復するまで没交渉であったことも影響していよう。

3.2 日本が接したイスパニア文化の変遷

前節の考察の背景には、当然のことながら日本のイスパニアに対する歴史とその変遷が深く関わっている。そもそも、日本が最初に興味を抱いたスペイン語圏は本家の「スペイン」ではなく、ラテンアメリカ諸国である。周知のように、19世紀後半から20世紀前半にかけてコーヒーブームが世界中に沸き起こり、海外で一攫千金を夢見た日本人が大挙してラテンアメリカ諸国に押し寄せた（小澤（2011: 15））。ラテンアメリカ諸国の奴隷制度廃止（増田・山田編（1999: 238-40））と日本の人口過多がその動きに拍車をかけた。その時に必要だったのは、ラテンアメリカの文化的背景に関する知識などではなく、商売及び植民的計画を成立させるための語学力であった¹²。

日本政府も政策の面からこの事業を後押しし、1873年には現在の東京外国語大学の前身である東京外国語学校を設立した。だが、実際に国策としてスペイン語を重視するようになったのはそれから20年以上を要したようである。1890年1月10日の第9回帝国議会貴族院において、男爵渡辺清が「南米地方も条約談判するとか云ふことでありまして、彼の地方は多く西班牙语で、然れば、是は今入用がないと云ふて置くべきものではない」と発言している（『大日本帝国議会誌』第3巻及び浅香（2013: 60-1）を参照）。そして、この発言を受けて1899年に東京商業学校に外国語学校が付設されて東京外国語学校が復活する。

この一連の流れで注目すべきは、帝国議会においてもヨーロッパのスペインは軽視されており、代わりに「南米地方の商業」が重視されていた点である。その証拠に、明治時代のスペイン語の学習書は大半が会話練習帳の色彩を帯びており、文法やスペイン語圏の文化についての解説はほとんど見られず、辞書出版の形跡もない（浅香（2013: 17）も参照のこと）。

こうした「語学偏重、文化軽視」の姿勢は学界にも波及した。1955年に初の全国的学会である「日本イスパニヤ語学会」が設立されたが、その名が示すように、研究対象はもっぱら語学に限定されていた。1975年に

語学偏重の反省から「日本イスパニヤ学会」に改称されたが、現在もスペイン語学やスペイン語教育などの研究発表が中心で、文化や歴史についての発表は少ない。

その影響は、日本がラテンアメリカ文学ブームに乗り遅れるという形で顕著に現われた。1960年代にコロンビアのガブリエル・ガルシア＝マルケスやペルーのマリオ＝バルガス＝リョサなどの「魔術的リアリズム小説」が全世界を席卷し興奮の渦に巻き込んだが、日本では一部の好事家や研究者が関心を示しただけで、国や国民にまで敷衍した流行とはならなかった。また、ミゲル・デ・セルバンテスの『ドン・キホーテ』を会田由がスペイン語から直接完訳したのは1962年のことである（前篇1960年、後篇1962年）。それまで英語からの重訳はあったものの、世界的ベストセラーとなった『ドン・キホーテ』の翻訳の遅滞やラテンアメリカ文学への無関心は、日本が如何にイスパニア文化に対して鈍感だったかを推し量る手掛かりとなる。

日本のマスメディアがスペインを大々的に取り上げたまっかけは、1992年の3つのイベント、即ちバルセロナオリンピック、セビーリャ万博、コロンブスのアメリカ大陸「発見」500周年記念行事である。それまで「西欧の辺境国」的な扱いであったスペインが、突如生の姿を携えて日本に上陸したことで、スペインの情報に貧困だったマスメディアはステレオタイプの「スペイン像」、即ち、「太陽と情熱の国」「フラメンコの国」といった明治時代の見識に飛びついた。だが、急に降って湧いた「スペインブーム」の効果も、包括的にイスパニア文化を理解するという姿勢が人口に膾炙するには程遠く、結局、日本の「イスパニア文化観」は、現在も明治時代の二番煎じに墮しているのである。

4. 本稿の第2 アンケートの調査と分析

前節では、日本人が未だにイスパニアへの伝統的なイメージを保持していることと、それに付随する日西交流史の背景を概観した。畢竟、日本人のイスパニア文化観は極めて貧弱で、100年前とさほど変わらないことが示唆されたが、それでは果たして週に2回スペイン語を「第二外国語」として履修するだけの学生が、イスパニア文化に関する「情報弱者」を脱することが

できるのかを本節以降で問う。

第2アンケートの概要は以下の通りである。

実施場所：東北大学川内キャンパス講義棟

実施時期：2017年7月10日、11日、12日

実施方法：教室内で一斉に行なう記述式。複数回答可

実施時間：10分（必要があれば、それ以上）

第2アンケートの内容は以下の通り。

Basic-Q1: あなたの年齢を教えてください。

Basic-Q2: あなたの性別を教えてください。

Basic-Q3: あなたのスペイン語学習暦は何年ですか。

Q1: あなたは「スペイン語圏文化入門」のリーフレットを読みましたか。

Q2: Q1で「全く読んでいない」と答えた方以外に伺います。どの項目が一番興味を惹かれましたか（複数回答可）。

Q3: 「スペイン語圏文化入門」のリーフレットの中で、取り上げて欲しいトピックがありますか。あるとしたら、どのようなことですか。

Q4: あなたは、スペイン語関連の授業を履修する前と、今では、「スペイン」という言葉に対して印象は変わりましたか。

Q5: Q4と関連します。スペインやスペイン語圏に対して（スペイン語履修前を想定しながら）今この瞬間連想することは何ですか。

Q6: あなたの「スペイン語科目」の成績はどれくらいだと思いますか。自分で自分に「スペイン語の成績」をつけるとしたらどれくらいか、という指標で教えてください（実際の成績とはまったく関係ありません）。

Q7: スペイン語の向上に、スペイン語圏の「文化的知識」は役立ったと思いますか。

Q8: スペイン語の授業を履修してから、授業以外でスペインやスペイン語圏に関する情報に触れましたか。あるとしたら、どのような媒体で、どんなことに触れましたか。

4.1 本稿の第2アンケートの調査結果

第2アンケートと第1アンケートの違いは以下の通

りである。

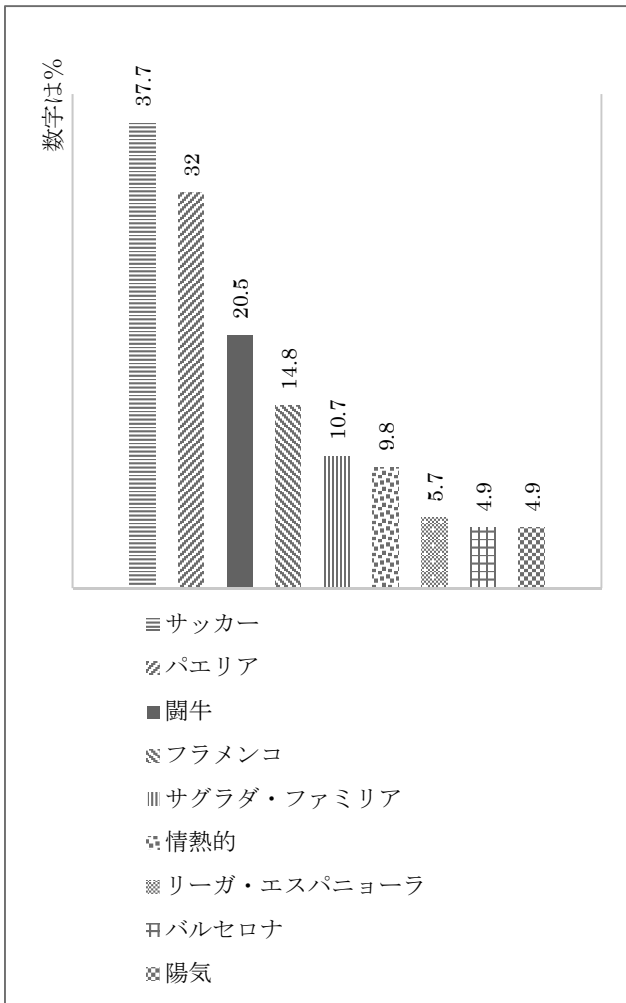
①著者が執筆した『スペイン語圏文化入門』と題する24ページの冊子を履修直後に学生に配布したこと。内容は「日本におけるイスパニア研究」「スペイン語の発達」「スペインの気候、地理、主な産物、農産物」「イベリア史とそれに関する地理的要因」「スペインの美術」「スペインの文学」「ラテンアメリカ各国」「ラテンアメリカの歴史」「ラテンアメリカの文学」である。巻末に「更に勉強したい学生のためのブックガイド」を付したが、これも含めて学生に通読を強制していない。

②通常の初修語としての「スペイン語」科目の合間に、著者が文化的な紹介の時間を不定期で設けて学生に講義をしていること。具体的には、スペイン世界遺産のDVD（TBSテレビ『世界遺産』）の鑑賞、福冨教隆著『動く！スペイン語』（朝日出版社）に付随している文化紹介のDVDの鑑賞とその解説、その他、空いている時間を利用してイスパニア研究の変遷やスペイン語の発達と特徴などについて講義をした。

③語学科目の「スペイン語」を履修してから約3ヶ月が経過しており、学生がスペイン語学習を通じてイスパニア文化に興味を抱いた可能性があること。但し、筆者は学生に「イスパニア文化について調べること」といった類の課題は出していない。

第2アンケートの「スペインやスペイン語圏に対して今この瞬間（スペイン語を履修して3か月）連想することは何か」という問いに対する語彙のランキングは以下の通りである（表2参照）。

①サッカー（9（7.4%））、②情熱（8（6.6%））、③治安悪化（7（5.8%））、④男女の恋愛が盛ん、スペイン語が公用語の国が多い（6（5.0%））、⑥パエリア、文化、率直（5（4.1%））、⑨広場、歴史的建築物、ラテンアメリカ、スペイン語の難しさ（4（3.3%））、⑬スペイン語はほぼローマ字読み、闘牛、友好的、メキシコ（3（2.5%））、⑰明るい、陽気、ラテン、日本と異なる、スペイン国内で異なる言語を話す、魅力的な国、シエスタ、建築（2（1.7%））



【表2：3ヵ月後の「スペイン」の連想（8位まで）】

回答の絶対数が少ないのは、第1アンケートとは異なり、かなり多様な意見が出て回答が割れたことに起因する。その中でもランキングの上位に食い込んでいるのは、やはり「スペインの伝統的なイメージ」を体現させるタームで、サッカーや情熱、ラテン（アメリカ）、パエリア、シエスタなどが顔を見せている。一方、伝統的でありながら後退を見せたのはフラメンコ（1）やサグラダ・ファミリア（1）（0.8%）、タンゴ（0）などで、これらはいずれもランク20位以下である。

逆に新しくランクインしたのはほとんどがスペイン語に関する知識である。これは、第1・第2アンケートを行なった場所が「スペイン語」という語学授業の性質上、いきおいスペイン語に関する受講生自身の知識や想いなどが総花的に語られていることに因る。それ以外の特徴としては、第1アンケートと同じく固有名詞が陰を潜めていること、スペイン人の気質を表す

単語が多く現れたことなどが挙げられる。

以上から結論できることは、初修語としてのスペイン語科目を履修して3ヶ月が経過した後も、学生のイスパニア観は旧態依然のまま、第2アンケートの結果は第1アンケートや松田アンケートと大差ないということである。坂東アンケートでは松田アンケートや本稿の第1アンケートとは違った結果になっているのに、なぜ（多少なりともイスパニア文化について講義した後の）第2アンケートの結果は坂東アンケートのそれと類似しないのだろうか。

その答えは、恐らく学生のイスパニアに対する根本的な意識の違い（坂東アンケートの対象者はスペイン語を専門とする学生で、本アンケートの対象者にとって、スペイン語は付随的な「第二外国語」である）を別にすると、やはり授業の性質の違いによるものと思われる。坂東が担当した「スペイン文化の基礎知識」は、既存の語学習得を目的とする「スペイン語」とは完全に独立して存在し、そこでは授業時間の全てをイスパニア文化の解説に充てることができる。一方、著者の担当した科目「スペイン語」は、あくまでもスペイン語の習得を目的としたものであり、イスパニア文化の講義は単なる付録でしかない。

だが、本アンケートの対象となった東北大学の学生は、スペイン語を単なる「必修の初修外国語」と位置づけ、義務的に（あるいは意に反して）履修しているわけではない。履修直後の第1アンケートで「進んでイスパニア文化に触れたか」という問いに「はい」と答えた学生は僅か13%（「はい」16名、「いいえ」90名、無記名16名）だったのに対し、3ヶ月間の「スペイン語」履修後の第2アンケートのそれは32%に跳ね上がる（「はい」39名、「いいえ」40名、無記名42名）。

また、筆者の『スペイン語圏文化入門』に多少なりとも目を通した学生は全体の56%に上る（「ほとんど読んだ」3名、「少し読んだ」65名、「ほとんど読んでいない」24名、「全く読んでいない」29名）。当該冊子の通読を強制していないことを考えると、これらの事実は、スペイン語科目を履修後に学生が自主的にイスパニア文化に接しようとしたことを示唆している。

更に興味深いデータは、「スペイン語を習得する上で、イスパニア文化の知識は役に立つと思うか」とい

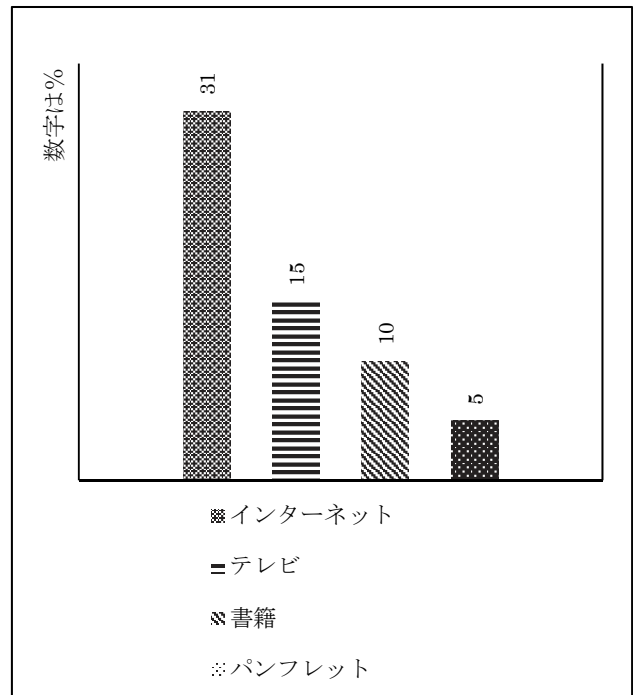
う問いには、実に96%の学生が「役に立つ」と答えていることである（「大いに役立つ」34名、「少し役立つ」82名、「あまり役に立たない」5名、「全く役に立たない」0名）。現在の第二言語習得理論は、ある言語が話されている地域の文化的知識が当該言語の語学力向上に利すること（少なくとも害にはならないこと）をほぼ自明としているが¹³、学生はそうした専門知識がなくとも直感的に「文化的知識と語学力には相関関係がある」ことに気付いているのである¹⁴。

更に、「文化的知識が語学習得に役立つ」と回答した学生の多くは、自分のスペイン語習得状況に比較的満足し、自己肯定感が強い傾向にある。実際、第2アンケートでも自分のスペイン語に高い自己採点（AAやA）をつけた学生は、積極的に「イスパニア文化の知識」を得ようとしている。

4.2 第2アンケート分析の総括

これらのデータを総括すると、おおよそ以下のような現状を推察することができる。即ち、スペイン語を履修するにあたって、学生は語学力向上のためには純粋にイスパニア文化に対する興味を持って、（受動的な場合もままあるものの）イスパニア文化の情報に接しようとする。そして、与えられた媒体は比較的積極的に利用しようとするが、少なくとも東北大学の初修語関連の授業においてはその情報は質・量共に貧弱である。『スペイン語圏文化入門』はたった24ページの小冊子であるし、筆者が授業時間の合間を縫って行なった「雑談的」文化講義の効果は推して知るべしである。

また、学生が自主的に接する媒体の31%はネット（39名中12名）である。ネットは手軽に情報を得るには適しているが、自分が接したい情報だけを切り取り、全体的・否定的な情報は容易に切り捨て、無視することができるというデメリットがある¹⁵。一方、テレビ（39名中6名（15%））や書籍（39名中4名（10%））、パンフレット（39名中2名（5%））などの媒体に接する学生もいるが、日本のマスメディアは基本的にイスパニアにあまり大きな関心を払っていないため、その情報は明治時代の伝統的なステレオタイプにとどまっている（表3参照）。



【表3：学生のスペイン関連情報アクセス先】

学生のイスパニアに対する知識が乏しいことを更に示しうるデータもある。『スペイン語圏文化入門』でどの項目が最も興味を惹かれたかという問いに対し、全体のトップである27%（124名中34名）の学生が「スペインの気候、地理、主な産物、農産物」を挙げている¹⁶。実際のところ、この項目はスペインに関する基礎的・百科事典的知識の記述に終始しており、他の項目に比べて専門性が劣る。つまり、学生はまず「未知の国であるスペインとは何か、場所も含めてその全体像を探る」ために地理的な記事に目を通してという可能性もあるということである¹⁷。

結果として、学生がイスパニアに関する乏しくかつ古い知識を補おうとしても、アップデートされていない貧弱なデータしか手近にはない。そのため、当該調査の学生を含む「一般的な日本人」は、100年以上前のステレオタイプのスペインのイメージから脱却することができないのである。

5. 総括、今後の課題と改善に向けての提言

ここまでの議論で明らかになったことは以下の通りである。

- ①いわゆる「一般的な日本人」は、（マスメディア

も含めて) 現在でもイスパニアに対して(サッカーなどの一部の例外を除いて) 明治時代の認識しか持っていない。

②ある程度現状に即したイスパニア観を持つためには、(ちょうど坂東アンケートが示すように) それなりの専門的な知識を提供する場が必要である。

③第二外国語として「スペイン語」を履修しているだけの学生は、僅かな刺激(講義中の教官による雑談や小冊子など)によっても容易にイスパニア文化の知識欲が刺激されうる。

④そうした学生は、イスパニアに関する知識を欲しているが、それは恣意的かつ限定的である。

上の諸問題全てを解決するのは現在の日本ではほぼ不可能である。そもそも、スペインやラテンアメリカは未だに日本にとって地理的にも心理的にも遠い国である。いきなり僻地の国に関心を持つと言われても、大方の日本人は戸惑うし、そもそもイスパニア研究を専門外とする学生には他にすべきことが山ほどある。

だが、初修語としてスペイン語の語学科目を履修する学生にとっては、語学の効率的な習得の観点からもイスパニア文化をないがしろにすることは出来ない。スペイン語の運用能力を高めるためにはイスパニア文化の基礎的知識は不可欠であるし、本アンケートが示すように学生はそれを望んでもいる。

従って、学生の知的探究心を満たし、かつ語学能力を向上させるためには、まず語学科目の「スペイン語」以外にイスパニア文化を紹介・教授する何らかの補助的な「イスパニア文化論」の講義が必要である。実際、坂東が勤務している京都外国語大学の他に、この類の「イスパニア文化論」を開講している大学は数多く存在する。そして、総じてイスパニア文化の講義に重点を置いている大学は、語学としてのスペイン語科目の質も高い傾向にある(例えば上智大学や東京外国語大学など)。

そして、語学と文化論が切り離せないことを自明とするならば、スペイン語とイスパニア文化の両者を積極的に講義することで、学生の「イスパニア観」も変化し、最終的に日本人がスペインに抱く「旧態依然とした伝統的イメージ」から脱却する一助となると思わ

れる。

参考文献

- 浅香武和. 2013. スペイン語事始. 同学社.
- 有本紀明. 1983. スペイン・聖と俗. NHKブックス.
- 坂東省次. 2008. “スペインと日本”. 現代スペイン読本 知っておきたい文化・社会・民族. 川成洋・坂東省次編. 丸善書店. 201-13.
- Gardner, Robert and Lambert, Wallace. 1972. *Attitudes and Motivation in Second-Language Learning*. Newbury House.
- 原誠・小池和良. 1995. スペイン人が日本人によく聞く100の質問. 三修社.
- Horwitz, Elaine. 1987. “Surveying student beliefs about language learning”. In Anita Wenden and Joan Rubin (eds). *Learner Strategies in Language Learning*. Prentice-Hall international (UK) Limited, 119-29.
- 市河三喜・市河晴子. 1933. 欧米の隅々. 研究社.
- 池上岑夫他. 1992. スペイン・ポルトガルを知る事典. 平凡社.
- 加藤清方. 2002. 外国人留学生に対する日本語教育と理科教育のカリキュラム連携に関する基礎研究. 科学研究費研究成果報告書. 東京学芸大学.
- 川成洋・坂東省次. 2008. 現代スペイン読本 知っておきたい文化・社会・民族. 丸善書店.
- 河野俊之. 1994. “日本語学習一般に対する学習者の信念について”. 日本語研修コース修了生追跡調査報告書. 名古屋大学留学生センター. 77-83.
- Lippmann, Walter. 1922. *Public Opinion*. The Macmillan Company.
- 丸山圭三郎. 1981. ソシユールの思想. 岩波書店.
- 増田義郎監修. 1992. スペイン. 新潮社.
- 増田義郎・山田陸男編. 1999. ラテン・アメリカ史 I. 山川出版社.
- 村松梢風. 1956. “スペイン.”, “俠盗・闘牛”. ヨーロッパの春: 女のいる風景. 読売新聞社.
- 小澤卓也. 2011. “コーヒーの味は歴史が決める. -グローバル・ヒストリー的アプローチ”. 立命館言語文化研究23巻2号. 9-25.

- 佐々木孝. 2015. スペイン文化入門. 彩流社.
- 白畑知彦編著. 2004. 英語習得の「常識」「非常識」第二言語習得研究からの検証. 大修館書店.
- 白井恭弘. 2008. 外国語学習の科学 第二言語習得論とは何か. 岩波新書.
- 牛島信明他編. 1999. スペイン学を学ぶ人のために. 世界思想社.
- 山内進編著. 2003. 言語教育学入門. 大修館書店.

注

- 1 本稿は、平成28年度東北大学高度教養教育・学生支援機構「教育開発推進経費」の「事業名: スペイン及びスペイン語圏文化を紹介するリーフレットの作成」の成果報告である。
- 2 スイスの言語学者フェルディナン・ド・ソシュールも、ある語の形が変わらずとも他の語との関係が変わった場合、その語は言語という体系の中で差異を生み出しうると述べている（分かりやすい解説に丸山（1981: 108-9）などがある）。
- 3 松田アンケート、坂東アンケートとも具体的な数字を発表した媒体はない。
- 4 松田アンケートは、1959年から1960年にかけて松田がスペイン各地で行った日欧交渉史の講演のために用意されたもので、紙媒体での発表は管見では見当たらない。そのため、松田アンケートの結果は坂東（2008: 206）の記述を踏襲している。
- 5 原・小池（1995: 120）は、日本人は総じて闘牛が好きではないと述べている。しかし、いずれのアンケートでも闘牛が極めて上位にランクインしていることを見ると、現在の日本人は闘牛に対して非常に強い関心を持っていると言えよう。ただ、そのまえがきにおいて原は「著者（原）は日本および日本人について相当な偏見を抱いているらしい」と自虐的に述べていることや、伝統的には英語学者市河三喜・晴子や画家の村松梢風が闘牛に対して嫌悪（時に憎悪）の感情を抱いている（市河（1933）及び村松（1956））ことを見ると、闘牛に対する日本人のイメージは賛否両論あるということだろう（牛島他（1999: 295-6）も参照）。
- 6 複数回答が可能のため、合計が100%を超えている。
- 7 坂東は、アンケート結果において「最近の若者」という記載だけに留めていることから、当然のことながら当該調査で「一般的な日本人像」を想定しているわけではないと思われる。
- 8 本来ならばそれに加えて「地域差」「年齢層」「男女の均等性」などを考慮に入れなければいけないのは自明の理であるが、本調査では新入生のみを対象を限定している。また、統計学的に見ても僅か120人強の大学1年次生を調査しただけで「一般的な日本人像」を想定することは出来ない（そもそも「一般的な日本人」とは何かも確立することは不可能である）。坂東アンケートとの比較はあくまで程度差である。そうした意味では、松田アンケートは坂東アンケート及び本稿での調査と比較して、その規模、対象者の属性の広範さなどの点からも、非常に本格的で特筆に値すると言えよう。
- 9 後述の第2アンケートでは、「実際にスペイン料理レストランに行って、パエリアやアヒージョを食べてきた」と記載した学生がいた。
- 10 松田アンケートでは「ヴェラスケス」となっているが、これはスペイン語でvがbの音で発音されることを知らず、英語（音声）学の知識で回答していることに由来する（ベラスケスのスペイン語綴りはVelázquezである）。この手の間違いは少なくなく、例えばエラリー・クイーン編『ミニ・ミステリ傑作選』（創元推理文庫）でも、英文学翻訳の重鎮である中村保男が「ミゲル・デ・セルバンテス（Miguel de Cervantes）」を「セルヴァンテス」と訳出している（p.244）。
- 11 コルテスやピサロは実際にはメキシコ及びペルーを「侵略」しただけなので、「大航海」の範疇に入るかどうかは議論の余地がある。スペインが大航海時代にその名を轟かせたのは、ある「スペイン人冒険家」が名高い業績を上げたからではなく、スペインという国家が冒険家のパトロンの役割を積極的に担っていたからであろう。
- 12 日本のラテンアメリカ諸国への移住政策の過程で、幾多の「アジア人迫害」が起きている。例えば、1956年から1959年にかけてドミニカ共和国に移住した日本人は現地人からの略奪や迫害に遭った。完全に和解したのは2006年である。現在の多くの日系ラ

テンアメリカ人は、当時の日系移民が現地に同化した結果の産物である。

- 13 1998年に告示された小学校の学習指導要領の「総合的な学習の時間」では、(1)「総合的な学習の時間を使って「国際理解教育の学習の一環」として外国語会話を行うことができる」とあり、外国語会話はあくまでも従属的な扱いである。また、外国語学習において文化理解が重要であるという理論を積極的に唱えた研究にHorwitz (1987)がある。実際の効果に関する報告は、加藤 (2002)、河野 (1994) 他を参照。また、この議論については山内 (2003) を参照。
- 14 文化に対する知的的好奇心と言語学習を結びつけた萌芽的な研究はGardner and Lambert (1972) である。この研究では、第二言語習得の動機づけを「道具的動機づけ (instrumental motivation)」と「統合的動機づけ (integrative motivation)」の2種類に分けている。文化的知識に関する動機づけは後者に当たる。当然のことながら、学習の動機づけは学習者が置かれている環境や必要性、切迫性の度合いなどに強力に左右されるため、この2分類を忠実に守って議論することはほとんど意味がない。白畑 (2004: 68-73) や白井 (2008: 74-6) を参照。白井 (2008: 176-7) は、文化的学習と語学学習の相乗効果は確実にあると断言している。
- 15 ジャーナリズム論の古典であるリップマンの『世論』でも、「自分の見慣れないものは見ず、自分の哲学に合致する事実に強い印象を受ける」という趣旨の記述がある (Lippmann (1922: 162))
- 16 第2位は「スペイン語の起源」と「スペインの美術」の18% (124名中22名) であり、最下位は「ラテンアメリカの文学」の2% (124名中2名) であった。
- 17 当然のことながら、学生が「スペインの地理」に純粹に興味を抱いて該当ページを開くことも大いにありうる。例えば、独立行政法人大学入試センターが発表した2014年の地理科目の受験者数は、地理Aと地理Bを合わせて地理歴史受験者全体の37.9%に上る (日本史A・Bは39.8%、世界史A・Bは22.3%)。だが、それを差し引いても、当該冊子における回答数の偏重は特筆すべきものであることに変わりはない。

